

平成二十一年度「花のまわりみち」

木村 里風子 選

俳句入選句

特選

(三句)

「特選一席」

手のひらにとらへ術後の花吹雪

大古 加代子

(評) 健康を取り戻した術後のよろこびの句。手のひらに捉えられたこのよろこびは何とも言えない。花を受けとめるまで快癒した。回復したよろこびが言葉になっていないが、手のひらにとらへ、これでよく表われている。言外のことばとはこのことである。

「特選二席」

広島我真青き空に満つ桜

赤松 蕙子

(評) かつては原子爆弾で空は濁り、地は炎に満ちた広島だが、今は平和で美しい桜の花が空に満ちているのであり真青な空は被爆後六十余年の広島を表している。造幣局広島支局の空だけではなく、広島から世界へ平和を発信したい真青な空である。

「特選三席」

やはらかき草に影濃し八重桜

亀井 朝子

(評) 柔軟な感覚で捉えた。まわり道の桜の下には若草が占めている。やわらかい草に影を落す、その影の濃さは若草が享ける影である。桜の色と影の色と若草の色と混り美しさを言外に表わしている。

風に落つ楊貴妃桜八重のまま

安富 正則

(評) 花吹雪といえは花びらが一片づつ散るが、八重のまま風に落ちたところを捉えている。気品を想像する楊貴妃という名を冠せられた桜だけに散り様も美しいに違いない。一陣の風はひとかたまりに花を散らした。衣をひるがえすが如くであったに違いない。その中に八重のまま落ちていたのが、いかにも楊貴妃の姿か。

すれ違ふ人も旅人花の道

岡村 みきえ

(評) 旅人も花人も、すれ違う一瞬は一期一会である。共通の目的、趣味を持つ人には特にこの気持ちがある。花を見るのではなく、花に会いにである。勿論、花を賞でる人同志が集まると、みな同胞に見えるのである。この道は、花に会う、人に会う道であった。

感嘆のあとみな無口花の下

河野 路子

(評) あまりにも美しい、あつと言ったあとの言葉がない。そんな桜であったのである。美しさを誉める言葉は美しいだけではない。言つに言えない感動もある。無口になった。これが美しさを証明している。

潦風に吹かるる花筏

石橋 康徳(康徳)

(評) 潦、にわたずみと読む、むつかしい漢字で意味は、には、俄か。たず、夕立のたち、み、は水。雨が降って地上にたまり流れる水のこととあった。雨で溜った水に落花が浮いていた。花筏は水溜りに連なった花びら。水たまりの花びらの美しさに目が止まった句。

通り抜け桜の影も桜色

上田 美知子

(評) 目線が影に移った。花ばかりを見上げて通った道を振り返ると影も桜色のようだと感じた。花の色のよさがそのまま地に影となっていたのである。花の美しさは、しばらくまなつらに残る。

佳作

(二十五句)

入院の手続き済ませ花を見に

河村 幸子

花眩し空の青さを引締める

山岡 祥子

患ひて二度目の桜巡りかな

中植 勝己

振り向きて軽き会釈や花衣

安達 基

山積み of 貨幣の袋のさくら冷え

伊藤 カズ子

雪洞の点れば花の景新た

斎藤 金二

花散らす雨とはならず小夜時雨

名越 佐枝子

息子又無職となりし花吹雪

吉川 徳子(徳子)

幸福の四つ葉を探す花の下

村越 縁

千の風楊貴妃桜吹き抜ける

松井 哲夫

楊貴妃桜そびらに写る米寿かな

中田 貞子

琴の音に人と花とがとけ合つて

勝山 君江(きみこ)

せがまれて夜桜に押す車椅子

住田 祐嗣

青空を隠してしまふ八重桜

日田 富恵

素通りの樹となり果てる散る桜

若宮 直美

夫と来てつかずはなれず花の径

大隅 彪（三虎）

手毬といふ名のふさわしき八重桜

谷口 千恵子

病む夫の見上ぐ鬱金の桜かな

中植 紀子

楊貴妃に逢ひに来ました花のみち

神波 瑞江

花の径風がくれたる髪飾り

江川 美栄

花房に湿り残して昨夜の雨

竹島 サチ子

散るもよし一期一会の花の道

宮本 恭子

乳母車花の下にてあやしをり

谷口 敬誠

束の間の看取り解かれて花の下

井原 淑子

さくらいつばいしあわせいつばいはなのその

白賀 エチエンヌ

選者吟

木村 里風子

街川へ造幣局の桜散る